

雑誌「展望」総目次（その4）

— 昭和四十七年十月〜昭和五十一年九月 —

高塚雅  
服部宏昭

本稿は高塚雅・服部宏昭の共同執筆による中京大学図書館蔵の雑誌「展望」（筑摩書房、昭和四十七年十月〜昭和五十一年九月）の総目次である。今回は服部が昭和四十七年十月号（第一六六号）〜昭和四十九年九月号（第一八九号）までを、高塚が昭和四十九年十月号（第一九〇号）〜昭和五十一年九月号（第二二三号）までをそれぞれ担当した。相互に確認作業を行ったので、誤りがあった場合は両名に等しく責任がある。

尚、凡例については、「雑誌「展望」総目次（その1）」（『中京大学図書館学紀要』第三十三号）を参照されたい。

昭和四十七年十月 第一六六号

【インタビュー】 遠いベトナム——在日ベトナム人留学生は語る——

グエン・アン・チュン／ききて 編集部 (10-24)

刑務所にはいれるならば／弾圧機構——百年の継承／日本は第二の敵国／解放のための民族戦線／日本を見つめるベトナムの眼／戦禍のあと、町工場に托す夢

「われわれの方からお聞きしたい」朝日新聞記者に

よるグエン・チ・ビン南ベトナム臨時革命政府外相 兼パリ会談首席代表へのインタビュー抄録 (朝日)

8・22) 無署名 (24-24)

レモンと爆弾——グエン・タイ・ビンの死と言葉——

井上澄夫 (25-40)

【対談】 戦場と反戦 長賀一哉／鶴見良行 (41-53)

六八年テト攻勢で失ったもの／春季攻勢のねらい／人類史的意味をもつベトナム戦争／和平の可能性／民衆の生活基盤への浸透／皆殺し戦争／アメリカ資本主義の延命策／拡散せざるを得ない 反戦運動／我々もまた戦いを

展望 同時代

文学の場について 三木卓 (54-55)

展望 閑話

わたしのアラン 富岡多恵子 (56-57)

書庫の移転 松田道雄 (58-59)

よそもの連合太平記 (9) 今のところ埼玉ベ平連 小沢遼子 (60-69)

曠野から「読切連載 その2」 川田順造 (70-87)

展望 現場の目

ある場所から 福地幸造 (88-89)

山村を追われる者 宮本常一 (90-91)

【小説】 天の魚 (第八回) 石牟礼道子 (92-107)

【ルポルタージュ】 水俣病——苦悩の果ての旅 土本典昭 (108-121)

開発⇨公害再開発——「柳町再開発計画」批判——

岩崎好陽／小山功／田村和寿／土井陸雄 (122-135)

夢見る奢り 佐藤信 (136-137)

ぼくにとつての学校 菅龍一 (138-149)

女の幸福について

鈴木いづみ (150—156)

怠けと自由——ポール・ラファルグ『怠ける権利』をめぐって——  
井上俊 (158—168)

【イラスト】ああ忙がしい！ 忙がしい！

加藤芳郎 (163—163)

レーニン・素人の読み方(続きの十二)——もう一度「文献」

または「文学」のこと——

中野重治 (169—177)

歴史変革の思想と現代(下)——混迷からの脱出——

内田芳明 (178—205)

【小説】安曇野 あずみの 〈第四部〉第十回

白井吉見 (206—229)

巴卓

韓国で見たこと、考えたこと

加藤建二 (230—230)

編集者と投稿者との間

盛口婦美 (231—231)

文章表現について

橋本大七 (231—232)

編集後記

(232—232)

「付記」表紙に「特集 ベトナムのいま」とあり。なお、

井上澄夫「レモンと爆弾——グエン・タイ・ビンの死と言葉——」には、グエン・タイ・ビン「平和と正義を愛する世界の人民への公開書簡」(36—40頁)が付されている。

昭和四十七年十一月第一六七号

展望 現場の目

その後

茅辺かのう (10—11)

こうじんさまのお炭

森崎和江 (12—13)

展望 同時代

変身聖者

片桐ユズル (14—15)

〈抑圧的寛容〉の具としての日本語

竹内芳郎 (16—17)

曠野から「読切連載 その3」

川田順造 (18—40)

汚れぬ手はあるか——新聞の内側から——

小泉貞彦 (41—50)

文筆人の社会的責任——鮎川信夫氏の言論への抗議を中心に——  
家永三郎 (51—59)

鹿島——「公害なき開発」の終末点——数字があばく「公共性」の実態——

近藤準子／協同調査者 岡沢和好／

高木泰／細川恭史／宮村光雄（60—76）

住宅行政の破産——公営住宅団地のダニ大量発生——

高松修（77—86）

郵便局で何が起っているか——郵政「マル生」の実態——

編集部（87—100）

峠の廢道——「秩父騒動」再考 序——

井出孫六（102—119）

### 現代犯科帳

ささやかな要望

星新一（120—121）

よそのもの連合太平記（10）終りのはじまり

小沢遼子（122—132）

【小説】天の魚（第九回）

石牟礼道子（133—150）

蘆花徳富健次郎（続十一）

中野好夫（151—160）

【小説】貴族（第十一回）

島本久恵（161—195）

【小説】安曇野あずみの（第四部）第十一回

### 円卓

学校も生徒も父母も

学制百年記念行事の危険性

「遠いベトナム」を読んで

これが日中の復交か？

【円卓欄投稿規定をめぐって】

もうひとつの意見

問題の提起者から

編集後記

白井吉見（196—227）

松島芳石（228—228）

米沢新平（228—229）

岡部長正（229—229）

郡司哲吾（229—230）

土岐寛（230—230）

角田芳治（231—232）

「付記」40頁に編集部による、川田順造「川田順造「曠野から」読切連載 その2」（第一六六号）の訂正記事が掲載されている。

昭和四十七年十二月 第一六八号

展望 現場の目

転籍

新川明 (10 - 11)

偽盗編曲

林光 (12 - 13)

展望 同時代

距離感

金石範 (14 - 15)

ベトナム戦争の「英雄」

清水知久 (16 - 17)

展望 閑話

今日のおかしさについて

木下順二 (18 - 19)

総受験体制の学校教育

武谷三男 (20 - 21)

なぜ文学か——闇を照らし、人間の全体をとらえる営みを——

高史明 (22 - 43)

コンピュータの労働と社会——私の鹿島レポート——

中岡哲郎 (44 - 75)

亡国日本からの再生を求めて——田中正造における自治と

林竹二 (76 - 90)

共同体の思想——

【鼎談】黄金の秤はあるか——教育・評価・能力社会——

佐藤忠男／羽仁進／益田勝実 (91 - 112)

『オール3』の波紋——評価する者として——／点のつけられ

るもの、つけられないもの／評価がないと安心しない社会／つむ

じ曲りと共に学ぶ仕合せ／個性に対する悪たくみ／評価は励みに

なるか／自己評価が理想／教育から閉め出されているもの／子ど

もを自動販売機にする教育／教育の機械化と教師の仕事／学校は

何をするところか／評価がやがて評価システムそのものを破壊す

る／「評価の多様化」をはかる産業界／学校という場で何ができ

るか／学校にもっと個性を／近代の魔術への批判として

\*第九回\* 太宰治賞募集！

株式会社 筑摩書房 (113 - 113)

学園闘争以後の知識人状況によせて——「専門職能意識」

と中央公論社闘争—— 折原浩 (114 - 142)

現代犯科帳

法、法ならざれば一条さゆり 竹中芳 (144 - 145)

植民地民族の抵抗——朝鮮人と沖繩人——

太田雅夫 (146 - 163)

レーニン・素人の読み方(続きの十三)——もう一度「文献」

または「文学」のこと—— 中野重治 (164 - 181)

蘆花徳富健次郎(続十二) 中野好夫 (182 - 195)

一九七二年(昭和四十七年)『展望』総目次(通巻157号)

（168号）

【小説】 関秀

安曇野あずみの 〈第四部〉（最終回）

無署名（196—200）  
秦恒平（201—231）

白井吉見（232—261）

円卓

「責任を痛感し、深く反省」に思う

牧野寛（262—262）

「二一・二五」について

勘川捷治郎（262—263）

読者と編集者

大沢由春（263—263）

編集後記

### 昭和四十八年一月 第一六九号

展望 同時代

大学教育の行方

竹内芳郎（10—11）

現われた言葉

三木卓（12—13）

日本人と精神分析

宮本忠雄（14—15）

展望 閑話

もの真似のむずかしさ

富岡多恵子（16—17）

社会科学の転回——文明の閉塞状況への対応を求めて——

高島通敏（18—34）

ことばの氾濫と喪失

上野昂志（35—45）

「開発植民地主義」のゆくえ

小泉貞彦（46—58）

【座談会】新たな共同体を求めて——水俣病患者と水俣病センター——

石牟礼道子／谷川健一／

田上義春／日高六郎（59—74）

田上さん、蜂を飼う／肩書きのある人間、ない人間／チツソの

オリの中で／地域から追放される／娑婆と異質な共同体／いかに

して地域に生きうるか

■アピール ■なぜ「水俣病センター」（仮称）をつくるのか

無署名（75—77）

よそもの連合太平記 〈番外〉散るや散らずや未練花

小沢遼子（78—87）

現代犯科帳

悪い夢

佐藤信（88—89）

冥界の星座——古代中国人における墳墓——

昭和四十八年二月 第一七〇号

興膳宏 (90 - 98)  
川田順造 (99 - 120)

展望 現場の目

廣野から〔読切連載 その4〕  
レーニン・素人の読み方 (最終回) — もう一度「文献」

反開発運動と公害  
松下竜一 (10 - 11)

または「文学」のこと —

展望 同時代

蘆花徳富健次郎 (続十三)

『街の灯』のラスト・シーン  
三神真彦 (12 - 13)

【小説】遠くから来るもの

展望 閑話

貴族へ最終回

本日只今味気なし  
富士正晴 (14 - 15)

【小説】安曇野 あずみの

【対談】思考の根底を確かめる

〈第五部〉第一回

阿部良雄／きたみひのる (16 - 35)

あらすじ

白井吉見 (202 - 229)  
無署名 (203 - 203)

田卓

田舎の暮らし — 生きている感覚の確かさ／一君万民のふし  
ぎなコミュニティー／人間のつきあい方にエヴォリユーションが

けむりが眼にしみる

鈴木孝 (230 - 230)

人民版「日本列島改造論」

大西和幸 (230 - 231)

死語

荒谷明文 (231 - 231)

編集後記

見法／帽子を脱いで独り石を積む／存在するものは存在するもの  
としか比べられない／模範的社会としての農村部落／何をもちつて  
流民化に抗するか／抽象名詞の使われ方／家来であることをやめ  
るために

【付記】148頁に中野好夫「蘆花徳富健次郎」の「第一部」

および「第二部」の訂正記事が掲載されている。

一九三〇年代の或る側面(一) — 過去と現在 —

預かり人の思想

久野収 (36 - 47)  
寺井美奈子 (48 - 62)  
石牟礼道子 (63 - 73)

編集者としての私の位置  
曠野から〔読切連載 その5〕  
蘆花徳富健次郎 (統十四)

原田奈翁雄 (150 - 164)  
川田順造 (165 - 189)  
中野好夫 (190 - 204)

【小説】天の魚 (第十回)

■第九回太宰治賞応募規定■

筑摩書房 (73 - 73)

【小説】安曇野あずみの〈第五部〉第二回

それでも「個」に抛りて

松永優 (74 - 82)

世の果ての音もきこえる耳——優雅なる音楽教育につい

円卓

て——

三宅榛名 (83 - 87)

生まれ変わるか村の共同体  
文化財保護法の改正を急げ  
拜啓小沢遼子さま

番城昌弘 (230 - 231)  
米沢新平 (231 - 231)  
伊賀奎子 (231 - 232)

【鼎談】末世をさぐる小説の道

大岡信／黒井千次／柴田翔 (88 - 105)

末世をひきうける／時間・空間のめりはりをもち込む／完結す

編集後記

ることへの嫌悪感／やはり人間の時間をつくる／ことばの激発力

をさぐる／芸術は根本的に批評である／不安定にさまよう主体

### 昭和四十八年三月 第一七一号

\*デイスカバー・ニッポン後遺症列島\*

ローンに託したわが人生は……

展望

マハル・コ・アン・ピリピナス——わたしはフィリピンが好き——

原総一郎 (106 - 118)

ユニークな仕事とは

川喜田愛郎 (8 - 9)

国府田恭子 (119 - 136)

「母親神話」の崩壊

小松左京 (10 - 11)

優しい実験者たち——脳研究と精神障害者の悲惨——

高杉晋吾 (137 - 149)

無為潜り

鈴木志郎康 (12 - 13)

歴史小説と民衆——鷗外、荷風そして一九三〇年代——

菊地昌典 (14 - 34)

観光で歴史を曲げるな

中野伝一 (165 - 166)

コミュニケーションの新たな地平へ——教育のあり方をめぐって——  
羽仁進 (35 - 47)

読者へ  
訂正

\*デイスカバー・ニッポン後遺症列島\* もうひとつの

「目白」 田原総一郎 (48 - 59)

「付記」 114頁に川田順造「曠野から」読切連載 その5」

田中政権の特質と日本の進路——外交・軍事・経済・内政の相互連関を考察する——  
武藤一羊 (60 - 80)

(第一七〇号)の訂正記事が掲載されている。

【小説】天の魚 (第十一回) 石牟礼道子 (81 - 89)

展望

昭和四十八年四月 第一七二号

出稼ぎ村の冬 天明佳臣 (90 - 91)

展望

在日朝鮮人文筆家のことについて 金石範 (92 - 93)

言語危機と現代

宮本忠雄 (8 - 9)

曠野から「読切連載 その6」 川田順造 (94 - 114)

日常性の表現

富岡多恵子 (10 - 11)

『魔笛』とフリーメーソン 高橋英郎 (115 - 125)

高く売ってなぜ悪いか

伊東光晴 (12 - 13)

蘆花徳富健次郎 (続十五) 中野好夫 (126 - 138)

風邪の治し方

阿奈井文彦 (14 - 15)

安曇野あずみの〈第五部〉(第三回)

権力とエゴイズム——小西反軍裁判における浜証言をめぐって——

白井吉見 (139 - 164)

真継伸彦 (16 - 34)

円卓

【対談】現代生物学を斬る——生物現象の本質は何か——

総合雑誌は生きる 番城幸 (165 - 165)

今西錦司／飯島衛 (35 - 53)

分子生物学の思いあがり／「自然」を忘れた生物学者／生命合成の問題／ミクロの世界にもエコロジーがある／適応説への疑問／サルからどうして人類が出てきたか／個性をどうとらえるか／照葉樹林帯と日本文化／文化が人類の分化をストップした／生物学の進むべき道

歴史への転落——青鬚（よむ）の囚（とら）と時間の乞食

デイヴィッド・グッドマン／藤本和子訳（54 - 69）

曠野から〔連載読切 最終回〕 川田順造（70 - 89）

一九三〇年代の或る側面（二）——国家と社会主義と戦争をめぐって—— 久野収（90 - 100）

\*デイスカバー・ニッポン後遺症列島\* チラと見たのが不幸のはじまり 田原総一郎（101 - 111）

【小説】天の魚（第十二回） 石牟礼道子（112 - 123）

蘆花徳富健次郎（続十六） 中野好夫（124 - 135）

【小説】安曇野あずみの 〈第五部〉（第四回）

白井吉見（136 - 163）

円卓

老人福祉を考える 伊東昭栄（164 - 164）

僧職者は求道者に立ち返れ 米沢新平（164 - 165）  
「出稼ぎ村の冬」を読みながら

読者へ

岡部長正（165 - 166）

訂正

昭和四十八年五月 第一七三号

展望

本日只今尚も味気なし 富士正晴（8 - 9）

「大きな魚は小さな魚を食べる」か？

三神真彦（10 - 11）

伊達に続かんとして 松下竜一（12 - 13）

水俣病を生きなおす 石牟礼道子（14 - 19）

道化的世界 山口昌男（20 - 61）

遅まきながら——外国文学者の感想——

河盛好蔵（62 - 67）

中国で見た三つの工場——わたしの中国見聞記・1——

佐藤藤三郎 (68 - 83)

昭和四十八年六月 第一七四号

アメリカ・二つの国境の間で——「素晴しき新世界」の十日

展望

間—— 室謙二 (84 - 97)

音楽のこと医療のこと 川喜田愛郎 (8 - 9)

まなざしの地獄——都市社会学への試論——

パチンコ潜り 鈴木志郎康 (10 - 11)

見田宗介 (98 - 119)

ゴルフ帝国主義 小松左京 (12 - 13)

蘆花徳富健次郎 (続十七)

中野好夫 (120 - 132)

地域開発とミニコミと 天明佳臣 (14 - 15)

【小説】安曇野あずみの 〈第五部〉 第五回

政府も独禁法違反? 伊東光晴 (16 - 17)

白井吉見 (133 - 162)

遺稿 西に東に 椎名麟三 (18 - 25)

円卓

創作ノート (1971より) 椎名麟三 (25 - 27)

お客様は神様ではない 大崎弟 (163 - 164)

「復活」へたどりつくまで 椎名麟三 (27 - 31)

立川問題から 小柴宏子 (164 - 164)

追悼・椎名麟三

「もったいない」と公害 古田砂津子 (164 - 165)

「夜の会」の頃——椎名麟三の想い出

一六六頁・一九〇頁『展望』の意味

埴谷雄高 (32 - 35)

なんばみゆき (165 - 166)

椎名氏と「たねの会」 佐古純一郎 (36 - 39)

読者へ

「菱の花」の冠——椎名麟三氏への感謝 真継伸彦 (40 - 42)

訂正

倫理と科学のはざま——清水幾太郎『倫理学ノート』を読んで 市井三郎 (43 - 53)

花田清輝の「ふまじめ」

川本三郎 (54 - 65)

メキシコ革命の遺跡をたずねて

荻田隆一 (66 - 73)

岐路にある《私》状況——市民社会の日本的形態——

田中義久 (74 - 94)

\*デイスカバー・ニッポン後遺症列島\* 「過疎」——都

市が仕掛けたこの罠

田原総一郎 (95 - 105)

【小説】天の魚 (第十三回)

石牟礼道子 (106 - 121)

蘆花徳富健次郎 (続十八)

中野好夫 (122 - 133)

【小説】安曇野あずみの 〈第五部〉第六回

白井吉見 (134 - 163)

円卓

「現代生物学を斬る」を読んで

盛口婦美 (164 - 164)

水俣病と「道化」

岩田透三 (164 - 165)

一六六頁・一九〇円の『展望』結構ではないか

林秀樹 (165 - 166)

### 昭和四十八年七月 第二七五号

#### 展望

コイン・ロッカーの考察

宮本忠雄 (8 - 9)

单位制の文化

富岡多恵子 (10 - 11)

動物園にて

阿奈井文彦 (12 - 13)

非合理からの回復——日常的合理性と知的想像力——

竹内啓 (14 - 38)

沖繩・その危機と神々——「復帰」後の沖繩・先島を訪ね

て—— 谷川健一 (39 - 50)

甘えとコミュニケーション——続・コミュニケーションの

新たな地平へ—— 羽仁進 (51 - 66)

\*デイスカバー・ニッポン後遺症列島\* ピンポン玉と

消滅計画 田原総一郎 (67 - 78)

中国の教育をみる——わたしの中国見聞記・2

佐藤藤三郎 (79 - 96)

第九回 太宰治賞発表

\*受賞作\* 権 宮尾登美子

選考経過

株式会社 筑摩書房 (97 - 97)

太宰治賞選評

読者へ

小説のおもしろさ、楽しさ

白井吉見 (98 - 98)

重畳のある作

唐木順三 (98 - 99)

描きたくて描いた切実さ

河上徹太郎 (99 - 99)

制作にこめた思ひの深さ

寺田透 (99 - 100)

新鮮な情熱

中村光夫 (100 - 100)

近來の收穫

吉行淳之介 (100 - 100)

第一次予選通過作品

株式会社 筑摩書房 (101 - 101)

【小説】第九回太宰治賞受賞作權 (かい)

宮尾登美子 (102 - 163)

受賞の言葉

宮尾登美子 (103 - 103)

【小説】天の魚 (第十四回)

石牟礼道子 (164 - 183)

蘆花徳富健次郎 (続十九)

中野好夫 (184 - 195)

【小説】安曇野あずみの (第五部) 第七回

白井吉見 (196 - 225)

母性における「まなざしの地獄」

松野日佐子 (226 - 227)

「花田清輝の『ふまじめ』」を読んで

服部滋 (227 - 227)

川本三郎氏に

こいずみひさし (227 - 228)

田中義久氏に——市民の感想

児玉淳 (228 - 229)

田中論文を読んで感ずること

番城昌弘 (229 - 230)

読者へ

訂正

「付記」表紙に「太宰治賞発表」とあり。103頁に宮尾登

美子の顔写真が掲載されている。なお、本号は中京大学

図書館では所蔵されておらず、名古屋大学附属図書館所

蔵のもので確認した。

昭和四十八年八月 第一七六号

展望

円卓

騷然山無然寺

富士正晴 (8-9)

フランク・バーデキー／中尾ハジメ訳 (72-87)

沖繩にて

三神真彦 (10-11)

【対談】町について

田村隆一／山本夏彦 (88-105)

北海道の事件を凝視する九州の眼

松下竜一 (12-13)

町が壊滅すること／震災後の文化住宅と被災後のニュータウン  
／死者がいない町／習慣を重んずべし／交通機関の進歩は「欲  
のかたまり／お化けはうしろからくる／世話にくだける／肉声の  
届く限度は人間の生きる限度

知覚の世界についての随想——生物学から見た自然——

藤井隆 (14-24)

\*デイスカバー・ニッポン後遺症列島\* あなたの水俣  
病は何なのか

【対談】東西読書学——ことばの本質にむかって——

吉川幸次郎／篠田一士 (25-43)

田原総一朗 (106-117)

「読書の学」が提起するもの／音調と詩法——日本人の漢文に

ついて／着色された音声——ことばのリズムは何から生まれる

か／音声と視覚性——中国語の特質をめぐって／音声・意味・

連想／ことばの曖昧さということ／日本人にとって古典とは／東

西と西洋、中国と日本——さまざまな伝統の中で

イカロスの翼

中国の医療と衛生——わたしの中国見聞記・3

佐々木幹郎 (44-57)

竹内論文を読んで

佐藤藤三郎 (58-71)

ダーティ・クエスチョン 「バーデキー先生」と子ども

過疎と地方政治

岡部長正 (165-166)

たち

【付記】73頁にフランク・バーデキーと文章の紹介記事が掲載されている。

昭和四十八年九月 第一七七号

展望

「大きいことはいいこと」か

川喜田愛郎 (8-9)

花札コイコイ潜り

鈴木志郎康 (10-11)

農村の老人と医療

天明佳臣 (12-13)

手仕事について

水尾比呂志 (14-18)

【対談】歴史のなかの大衆像——昭和史と大衆文学をめぐって

て

尾崎秀樹／菊地昌典 (39-57)

大衆文学への接近／三〇年代と大衆作家——大衆認識の補正

／歴史物と時代状況／歴史の全体像をどう描くか／歴史のイメージと虚構／大衆文学の「面白さ」——大衆の可塑性

一九三〇年代の或る側面 (三三)——文化的ナシヨナリズムの問題——

久野収 (58-66)

未公表書簡・上 ネチャーエフへ

M・バクーニン／蓮台寺晋・藤川健郎訳 (67-81)

解説

蓮台寺晋 (69-69)

昭和四十八年十月 第一七八号

展望

発展するタイの学生運動——タノム政権を揺さぶった十万人のデモ——

【小説】天の魚 (第十六回)

石牟礼道子 (95-108)

蘆花徳富健次郎 (続二十)

中野好夫 (109-121)

【小説】安曇野あずみの〈第五部〉第九回

白井吉見 (122-162)

円卓

「町について」への共感

岩田透三 (163-163)

『徂徠学案』への感謝——対談「東西読書学」に寄せて

児玉淳 (163-164)

「倫理と科学のはざま」にたいする疑問

佐藤茂 (163-165)

「ヒロシマ」を〈不戦〉に

読者へ

番城昌弘 (165-166)

世界破滅の幻想

宮本忠雄 (8-9)

ご自愛下さい

阿奈井文彦 (10-11)

あるのに使えない……

小松左京 (12-13)

虚構としての「経済人」

西部邁 (14-28)

バビロン捕囚——古代イスラエル知識人の運命と現代への思

読者へ

想的視座——

住谷一彦 (29-54)

嘘とコミュニケーション——続々・コミュニケーションの新

たな地平へ——

羽仁進 (55-69)

中国の文化・余暇・その他——わたしの中国見聞記・4

佐藤藤三郎 (70-86)

未公表書簡・下ネチャーエフへ

M・バクーニン／藤川健郎・蓮台寺晋訳 (87-102)

\*第十回\* 太宰治賞応募賞!

株式会社 筑摩書房 (103-103)

\*デイスカバー・ニッポン後遺症列島\* 生活者の奏で

る仔犬のワルツ

田原総一郎 (104-115)

蘆花徳富健次郎 (続二十一)

中野好夫 (116-130)

【小説】安曇野あずみの〈第五部〉第十回

円卓

白井吉見 (131-164)

終末論について

多勢えり子 (165-165)

公害問題の根の深さ

中村蔦子 (165-166)

読者へ

### 昭和四十八年十一月 第一七九号

展望

はなはだ、まことに結構

富士正晴 (8-9)

南の島で

三神真彦 (10-11)

我ら、ドンキホーテにあらず

松下竜一 (12-13)

【座談会】パニックと虐殺——関東大震災—朝鮮人虐殺を民

衆として考える——

李仁夏／飯島信／高史明／和田純 (14-35)

なぜ関東大震災—朝鮮人虐殺を問題にするのか／ことばを失

うこと、見限られること／ナマの実存を規定していた近代日本

の成立過程／パニックから虐殺へ——日本の民衆のなかで何が

起ったのか／内村鑑三と吉野作造——キリスト教の対応に何を

読みとるか／隣人とのかわり、生活とのかわりのなから／

出遭いとかがくぐり——「民族」の新しい地平へ

ぼくらは日本人ではない

金坂健二 (36 - 49)

アメリカ思潮の座標軸——リベラリズムの再生は可能か——

本間長世 (50 - 63)

日暮の孤影——淡路民権運動の位相——

松本健一 (64 - 86)

\*デイスカバー・ニッポン後遺症列島\* 現実感が土下

座をする 田原総一朗 (87 - 99)

【小説】天の魚 (第十七回) 石牟礼道子 (100 - 111)

蘆花徳富健次郎 (続二十二) 中野好夫 (112 - 125)

【小説】安曇野あずみの 〈第五部〉 第十一回 白井吉見 (126 - 163)

### 円卓

「手仕事について」を読む 羽野田健治 (164 - 164)

「手仕事について」を読んで 平野泰三 (164 - 165)

「ネチャーエフへ」を読んで 藤本擴 (165 - 166)

「生活者の奏でる仔犬のワルツ」を読んで

山岡重子 (166 - 166)

## 昭和四十八年十二月 第一八〇号 展望

「冷凍人間

川喜田愛郎 (8 - 9)

ある後日談

天明佳臣 (10 - 11)

トランプ「ドボン」潜り

鈴木志郎康 (12 - 13)

情報の意味をめぐって——情報と社会についての試論I——

中岡哲郎 (14 - 31)

亡国の民の伝統——メキシコ・ノート——

鶴見俊輔 (32 - 45)

「貴族」拾遺——鼓宇治橋のこと——

島本久恵 (46 - 65)

【小説】天の魚 (最終回) 石牟礼道子 (66 - 80)

蘆花徳富健次郎 (続二十三) 中野好夫 (81 - 94)

【小説】安曇野あずみの 〈第五部〉 最終回

白井吉見 (95 - 161)  
一九七三年 (昭和四十八年) 『展望』 総目次 (通巻169号  
180号) 無署名 (162 - 164)

円卓

「パニックと虐殺」を読んで 有富真操 (165 - 165)

読者へ

昭和四十九年一月 第一八一号

展望

あらためて民主主義を考える 高史明 (8 - 11)

貧乏神礼讃 花田清輝 (12 - 15)

ユートピア的世界への予感——伊達火力発電所建設阻止の

支援のなかで—— 花崎皋平 (16 - 30)

【対談】歴史と哲学の間で

市川三郎／上山春平 (31 - 54)

歴史とのかかわり／パスとの出会い／歴史と論理——論理

実証主義の陥穽／歴史と論理——終末史観批判／絶対主義的思

考と相対主義的思考の葛藤／クリティックの意義——ドクマか  
らの自由／批判主義を超えるもの——異文化の本質的な相互理  
解／儒教思想の日本的伝統——『神皇正統記』／仏教思想の日本  
的伝統——親鸞

古代歌謡論 吉本隆明 (55 - 73)

江藤淳の「場所」 川本三郎 (74 - 86)

【対談】解体から模索へ

粟津潔／原広司 (87 - 103)

均質な空間が世界を征服した……／美とは機能とは引き裂かれ  
た……／インターナショナルイズムの図式への疑問／一枚の絵  
の出現を信する／まず自らの目をうたがえ／らしさの世界にどう  
切りこむか／“栄光ある”建築・デザインの時代は去った／発見  
と出遭いを索めて／解析的なものから幾何的なものへ、確かなも  
のから不確かなものへ

一九三〇年代の或る側面 (四)——M・ホルクハイマーとフ

ランクフルト社会研究所—— 久野収 (104 - 114)

シンガポール・ブルース 長田弘 (115 - 128)

蘆花徳富健次郎 (続二十四) 中野好夫 (129 - 140)

古田晁に先立たれて

唐木順三 (141 | 148)

【小説】 休暇

吉村昭 (149 | 163)

第十回 太宰治賞募集！

株式会社 筑摩書房 (161 | 161)

円卓

言葉とその背影

喜友名嗣正 (164 | 165)

「天の魚」が完結して

番城昌弘 (165 | 166)

作られた元日本兵

星野義男 (166 | 166)

## 昭和四十九年二月 第一八二号

展望

「経済の政活化」の流れの中で

新野幸次郎 (8 | 11)

古書寸言

花田清輝 (12 | 13)

歴史小説とは何か (上) —— 史実と虚構の間 ——

菊地昌典 (14 | 35)

国の中のもうひとつの国 —— メキシコ・ノート ——

『天の魚』完結に思うこと少し

林秀樹 (165 | 166)

「天下大乱」の構造 —— キッシンジャー・ドクトリンの歴史的位相 ——

武藤一羊 (51 | 77)

現代企業の社会的地位 —— 産業界における自由の保障に關連して ——

正村公宏 (78 | 95)

状況としてのポルノ

金坂健二 (96 | 113)

諷刺からユーモアまで —— 中国人の場合 ——

中野美代子 (114 | 127)

歌論における戦後 —— 実朝・後鳥羽院・定家をめぐって ——

磯田光一 (128 | 143)

シンガポール・ブルース (承前)

長田弘 (144 | 151)

蘆花徳富健次郎 (続二十五)

中野好夫 (152 | 162)

円卓

ほ場整備事業の残したものと

米沢新平 (163 | 164)

「森永ミルク中毒」判決の示唆するもの

番城昌弘 (164 | 165)

宗教の信と政治の信

古田砂津子 (165 | 165)

読者へ

真鍋俊照／前田常作／横尾忠則 (104 - 119)

五六

昭和四十九年三月 第一八三号

展望

反「近代」とファシズム的思考

藤井正一郎 (8 - 10)

へ切り抜ける？

田原総一郎 (120 - 136)

方法序説

花田清輝 (12 - 15)

久保栄について

中野重治 (137 - 150)

実践と戯れ——「作る」ことと人間コミュニケーションとの関

連について——

竹内成明 (16 - 33)

円卓

中野好夫 (151 - 162)

海の上のピラミッド——新全総への旅——

室謙二 (34 - 48)

「企業」論への注文

土屋義次 (163 - 163)

「機械の神話」と「生命の神話」

竹内啓 (49 - 64)

「江藤淳の『場所』」について

藤本 拓 (164 - 164)

歴史小説とは何か (中)——史実と虚構の間——

菊地昌典 (65 - 88)

訂正

原田泰 (164 - 165)

予断と権力——島田事件の再審開始を求める——

青地 晨 (89 - 103)

【座談会】夢と曼荼羅

「シンガポール・ブルース」を読んで

井上康二 (165 - 166)

昭和四十九年四月 第一八四号

展望

「国民の知る権利」の内実

渡辺渉 (8-11)

舌足らず考

江藤文夫 (12-15)

黒い「月見座頭」——ヒューマニズム再考——

山口昌男 (16-24)

かけひきのない市場——メキシコ・ノート——

鶴見俊輔 (25-40)

エコノ族の生態

A・レーヨンフード／武藤博道訳 (41-51)

論文紹介

武藤博道 (42-42)

カタストロフの構造——メタ科学理論をめざして——

宇敷重広／佐和隆光 (52-67)

住民のための都市計画

大谷幸夫 (68-85)

歴史小説とは何か(下)——史実と虚構の間——

菊地昌典 (86-107)

\*デイスカバー・ニッポン後遺症列島\* 「分母の時代」

田原総一郎 (108-119)

のふんばり方

蘆花徳富健次郎 (続二十七)

中野好夫 (120-138)

【小説】霧と鐘

立川洋三 (139-164)

円卓

私の中の「江藤淳の場所」

山口準一郎 (165-165)

ソルジェニツィン問題に寄せて

竹沢尚司 (165-166)

訂正とおわび

中野重治 (166-166)

昭和四十九年五月 第一八五号

展望

敵は多すぎる

松原新一 (8-11)

詩人と都市

田村隆一 (12-15)

集落への旅

原広司 (16-32)

医学における伝統からの創造

山田慶児 (33-57)

キートンの「娘道成寺」——ヒューマニズム再考——

山口昌男 (58-71)

〈カオ〉と〈顔〉の間——シニャフスキーをめぐる——

現状維持不可能の現状——戦後世界史をいかに総括するか——

内村剛介 (72 - 83)

【対談】言葉と国境

長田弘 / 高史明 (113 - 128)

自由な言葉の発見 / 言葉の「共和国」への信頼 / 翻訳不可能なものこそ / 日本語をえらびなおす / 強制法定日本語の狭さ / 「国語」からの解放 / 言葉は国籍を負っていない / ひらかれた言葉への過程

葉への過程

\*デイスカバー・ニッポン後遺症列島\*

人間のこだわり

自衛隊の精神教育

蘆花徳富健次郎 (続二十八)

円卓

コンピュータ・ファシズム

雪は降っていないかった

シルジエニーツイン氏追放におもう

青木和子 (165 - 166)

昭和四十九年六月 第一八六号 展望

アジア認識の欠落

都市の崩壊

科学を考える (上)——情報と社会についての試論II——

反科学論への疑問——科学の意味と現代——

殉教の壁画のある町——メキシコ・ノート——

おまえは宇宙で死ぬ——「オカルティズム」を越えて——

夢日記——その1・円盤のでてくる夢

殺人被告の足のうら

\*デイスカバー・ニッポン後遺症列島\* 爆弾高校生の見えないすそ野

『歎異抄』の逆説——第二条を中心に——

横尾忠則 (102 - 109)

松永優 (110 - 118)

田原総一郎 (119 - 130)

井上澄夫 (8 - 11)

田村隆一 (12 - 15)

中岡哲郎 (16 - 36)

坂本賢三 (37 - 59)

鶴見俊輔 (60 - 80)

金坂健二 (81 - 101)

【インタビュー】留学まで

千輪慧 (131—148)

文学と人間の言語——その新しい諸関係——

吉川幸次郎／きき手 荒井健・竹内実・

ジョージ・スタイナー／大橋吉之輔訳 (27—42)

中島長文・中島みどり・山田慶児 (149—164)

日常のなかの住民運動——新全総の地域開発地をめぐって—— 似田貝香門 (43—61)

中国を中国として理解する／西欧尊重の風潮のなかで／京都の

虎とふんどし——もうひとつの意味、もうひとつの歴史—— 室謙二 (62—78)

学界と清末古典学者の接触／中国からの留学生と交わって／中国

文学の“日常性”に惹かれて／清朝の学問とヨーロッパ近代の思

想／自分でやらなくては……

【対談】「安曇野」対談

白井吉見／平野謙 (79—96)

円卓

妄評一つ

児玉淳 (165—165)

無住の老人

古田清一 (165—166)

『弓張月』式で／トンネルを越えたところで／石川三四郎の再評価／主題としての天皇と天皇制問題／虚美皮膜の間／家庭の中で／できごと／ひとつの典型としての相馬夫妻／愛蔵と黒光と礫山と／木下尚江と岡田虎二郎と無血革命／歴史というもののわからなさ／石川三四郎の魅力／近代日本の思想的跡づけ

昭和四十九年七月 第一八七号

展望

オカルト・ブーム考

井上俊 (8—11)

湧き水・ぼくの都市

田村隆一 (12—15)

構造をめぐって

遠山啓 (16—26)

おまえは宇宙で死ぬ (2)——“オカルティズム”を越えて—— 金坂健二 (97—114)

夢日記——その2・神様と宇宙人のでてくる夢

横尾忠則 (115—122)

\*ディスカバー・ニッポン後遺症列島\* 想像力がしな

やかにする

田原総一郎 (123 - 136)

軽薄なる男女

平野謙 (12 - 15)

【インタビュー】留学まで (承前)

関わりと離脱——メディア論のための覚え書——

吉川幸次郎／きき手 荒井健・竹内実・

竹内成明 (16 - 35)

中島長文・中島みどり・山田慶児 (137 - 147)

翳りのなかの集落——続・集落への旅——

ことごとしくないヒューマニズムと繊細さの魅力／京都大学

原広司 (36 - 51)

における中国研究の位置／現代中国への関心／中国のすべて

ヴィヤトリード——メキシコ・ノート——

を——／初めての中国——江南の輝きと豊かさ

鶴見俊輔 (52 - 67)

【小説】もうひとつの声

森一郎 (148 - 163)

官の科学・野の科学——姉崎正治と柳田国男——

円卓

柳川啓一 (68 - 83)

反近代の超越による近代の超越

久山信 (164 - 164)

わが内なる皇国史観——「任那日本府」をめぐって——

「連合赤軍事件」論

藤本拓 (164 - 165)

金達寿 (84 - 95)

雑誌記事の掲載責任を問う

中村篤子 (165 - 166)

おまえは宇宙で死ぬ (3)——“オカルティズム”を越えて——

読者へ

金坂健二 (96 - 118)

夢日記——その3・ぼくの死ぬ夢その他

### 昭和四十九年八月 第一八八号

展望

健康自慢

横尾忠則 (119 - 131)

日本訳『レーニン全集』について

熊王徳平 (132 - 134)

個と共同体と宇宙

松本俊夫 (8 - 11)

『彼岸過迄』をめぐって

中野重治 (135 - 146)

大岡昇平 (147 - 163)

巴卓

「反科学論への疑問」に対する異論

佐藤茂 (164 - 164)

ねばりと知性と

野村伸一 (165 - 165)

ドン・キホーテは理解されない

中村正直 (165 - 166)

の多様性とアイデンティティ／わからない存在としての「アジア」

アジアを知るために

鶴見良行 (53 - 69)

谷間の解放区——南ベトナム臨時革命政府地区での二週間——

ジョン・スプラゲンズ／金井和子訳 (70 - 82)

ヒッポ・レギウスへの道——アウグステイヌス遺跡巡

礼——堀米庸三 (83 - 95)

【座談会】古代文化のなかの出雲

金達寿／谷川健一 (96 - 113)

鉄の文化の渡来／古代出雲の歴史と神話／神在祭はウミヘビの

奉納で始まる／須佐之男命は新羅系の渡来人の祖神／出雲の自然

条件と海人の文化／鰐はサビかフカか？／須佐之男神話の構造／

須佐之男神話は南方系か北方系か／美保関の鶏林伝説／文化の重

層性と文化の担い手

金銭と精神 中村光夫 (114 - 125)

田舎の井戸——井伏文学の二重の視点——

A・リーマン／竹田裕子訳 (126 - 131)

\*ディスカバー・ニッポン後遺症列島\* 四十歳、おさ

昭和四十九年九月 第一八九号

展望

毛沢東のスターリン批判

矢吹晋 (8 - 11)

ハウスキーパー問題

平野謙 (12 - 15)

「時代錯誤」に抗する力——自衛官合祀拒否訴訟の意味

林健二 (16 - 31)

【対談】「アジア」論のための前提

青木保／戴國輝 (32 - 52)

「アジア」という言葉のあいまいさ／脱亜論批判の陥穽——倫

理と論理の混同／「アジア」認識の深化と少数民族問題／近代化

まり遅れ

田原総一郎 (132—143)

夢日記——その4・円盤と母の幽霊のでてくる夢

横尾忠則 (144—150)

昭和四十九年十月 第一九〇号  
展望

飢えと人類の未来

西川潤 (8—11)

【インタビュー】留学時代(上)

吉川幸次郎／きき手 荒井健・竹内実・

中島長文・中島みどり・山田慶児 (151—162)

いくつかの幸運／北京到着まで／延英舎——下宿での日常／

語学の勉強に明け暮れる／聴講生として北京大学へ／張作霖の北

京撤退——北京大学の復興

円卓

第一次教科書訴訟判決に思う 米沢新平 (163—163)

一読者として 加藤文吾 (163—165)

文化の変貌と総合雑誌 原田泰 (165—166)

読者へ 無署名 (166—166)

「付記」131頁に編集部によるA・リーマンの紹介記事が

掲載されている。

中野重治と志賀直哉

中野重治と志賀直哉 (12—15)

科学を考える(中)——情報と社会についての試論 Ⅲ——

中岡哲郎 (16—37)

現代日本文明について 桑原武夫 (38—54)

【対談】高度成長社会は何であったか——豊かな社会の不

安—— 多田道太郎／宮崎義一 (55—77)

文化Ⅱ文政・大正中期・昭和三十年代／昭和五十年からみた昭

和三十年／核家族の出現と企業の家父長制導入／欲望の空想力の

形としての商品／効率性と委譲の論理／「法人」という無気味な人

間が歩いている」／法人の擬制と実在／フランスの情報と日本の

情報／高い貿易依存度と外交／ハウ・ツー時代は終わった

【対談】表現とリアリティー

秋山駿／佐々木幹郎 (78—98)

他人との出会い方と表現／処方箋のない考え方／生活を「困っ

た」ものとして見る目／何が「現実」であるか——他人との衝

突／生き方の根本的スタイル——逸脱と執着／分裂とリアリ

ティー／共同体と闘争の退路と表現行為

「世界文化」のこと(一)——復刻版の刊行を機に——

新村猛(99—105)

松岡洋子(106—114)

北京の地下壕で

\*デイスカバー・ニッポン後遺症列島\* いやあな時代

田原総一郎(115—126)

への切り込み方

第十一回太宰治賞募集!

株式会社 筑摩書房(127—127)

日本訳『レーニン全集』について(二)

中野重治(128—138)

【インタビュー】留学時代(下)

吉川幸次郎／きき手 荒井健・竹内実・

中島長文・中島みどり・山田慶児(139—162)

転換期の北京大学で／大学と学派と学者——激しい対立／黄

侃から受けた感銘／書店との対応、北京大学での聴講／芝居・料

理・名所古蹟／江南へ——中国人として遇せられる／留学で感

得したもの／学問の態度と方法

円卓

あるヒツピーの東南アジア紀行

児玉淳(163—163)

ある保母の『灰色の青春』

牧野寛(164—164)

宗教と干渉

栗田勇司(164—165)

中村白葉先生最期の日

大和純子(165—166)

読者へ

昭和四十九年十一月 第二九一号

展望

石川雅望の復権

松田修(8—11)

文庫ばなし

大岡信(12—15)

住民運動として自立へ——反公害闘争十年の歩み——

宇井純(16—47)

僕らは公害輸出と闘い始めた

井上澄夫(48—62)

遠くからみた日本

三神真彦(63—75)

借地虚無党の謎

松本健一(76—85)

パレスチナ人であること

ファワズ・トゥルキ／武藤一羊訳（86―99）  
権力犯罪を解体するために——田原総一朗氏への批判——

「四畳半襖の下張」裁判への注文 遊佐雄彦（100―118）  
パレルモ紀行——シチリア晩禱事件の教会を訪ねて——

堀米庸三（128―137）

「世界文化」のこと（二）——復刻版の刊行を機に——

新村猛（138―145）

ぼくら否定派<sup>ネガティブ・ヴェン</sup>

クルト・トゥホルスキー／藤本淳雄訳（146―164）

解説 藤本淳雄（147―147）

巴卓

先日、飲み屋で 華島健（165―165）

「おさまり遅れ」を読んで 番城昌弘（165―166）

〔読者へ〕

〔訂正〕

〔付記〕 87頁にファワズ・トゥルキの紹介記事が掲載さ

れている。また、137頁に堀米庸三「ヒッポ・レギウスへの道」（二八九号）の訂正記事が掲載されている。

昭和四十九年十二月 第一九二号  
展望

クリエイティブ・マインド 藤田省三（8―10）

トムさんばなし 大岡信（11―14）

日常性・主体・歴史——科学的認識と日常実践をめぐって——

遠ざかるノートル・ダム 阪上孝（15―32）

世の中クルッテルという感じ——くるい きちがい考——

1—— ないないだ（41―51）

韓国の民衆をみつめること——歴史のなかからの反省——

シオニズムからの脱却——イスラエルのある平和主義者の歩み——

和田春樹（52―65）

ウリ・デイヴィス／中山一雄訳（66―79）

怪物としての自然——ゲーテの自然把握——

豊玉姫考——産屋の民間伝承と記紀神話の接点——  
芦津丈夫 (80—94)

谷川健一 (95—107)  
ぼくと花田清輝との戦争時代  
関根弘 (108—116)

「世界文化」のこと (三)——復刻版の刊行を機に——

新村猛 (117—123)

一九七四年 (昭和四十九年) 『展望』 総目次 (通巻181号  
192号)  
無署名 (124—126)

第十一回太宰治賞募集!

株式会社 筑摩書房 (127—127)

【小説】 亀裂  
秦恒平 (128—162)

巴卓

「悲しみ」  
井上康二 (163—163)

《沖繩のなれの果て》は見たくない

喜友名嗣正 (163—164)

教師聖職論に思う  
土屋義次 (164—165)

反自動車運動の方法と微光——宇井純氏へ

児玉淳 (165—166)

訂正

「付記」 67頁にウリ・デイヴィスの紹介記事が掲載され  
ている。

昭和五十年一月 第一九三号  
展望

対極

墓と死者ばなし

根拠地と文化——「ひとつの人民」の政治へ(ついで)——

武藤一羊 (16—39)

【対談】 '75年へ——政治的視座の転換

神島二郎／西川潤 (40—61)

インフレの政治学を身につけた田中内閣／実社会対実社会外の

矛盾／異議申し立ての国際的な運動／孤島状況のナショナルリズム

／「力の福音」による差別意識／個人の出世・家の出世・会社の

出世・国家の出世／インターナショナルな軍部／民衆レベルのイ

ンターナショナルリズム／それぞれが得手な文化を

死と死の間

黒田三郎 (62 - 78)

正常と異常——くるい きちがい考・2——

なだいなだ (79 - 88)

モハメド・アリの「火種」

戴國輝 (89 - 98)

チュー政権最後の日々?——サイゴンからの報告——

ジョン・スプラゲンズ／長岡富雄訳 (99 - 108)

近松論——劇の思想——

吉本隆明 (109 - 127)

日本訳『レーニン全集』について(三)

中野重治 (128 - 134)

第十一回太宰治賞募集!

株式会社 筑摩書房 (135 - 135)

「世界文化」のこと (四)

新村猛 (136 - 141)

三足の草鞋

熊王徳平 (142 - 147)

【小説】新連載 陽暉楼

宮尾登美子 (148 - 162)

円卓

花田氏の平明さ

小林美喜男 (163 - 163)

知識人の「身すぎ世すぎ」

竹沢尚司 (163 - 164)

「楳田幻想」

服部滋 (164 - 165)

「トムさんばなし」から

田原史良 (165 - 165)

肝心なことは、不可能な科学を夢見ることである

久山信 (165 - 166)

読者へ

### 昭和五十年二月 第一九四号

展望

紅茶は受皿で

小野二郎 (8 - 11)

未知を読む

外山滋比古 (12 - 15)

言葉の夢と批評

蓮實重彦 (16 - 39)

「水俣」から「不知火海」まで

土本典昭 (40 - 59)

「反科学」の意味するもの——諸批判にこたえる——

柴谷篤弘 (60 - 82)

グアダルーペの聖母——メキシコ・ノート——

鶴見俊輔 (83 - 99)

健康・この異常なるもの——くるい きちがい考・3——

イデオロギーとしての英会話

なだいなだ (100 - 111)

もののみえてくる過程——『科学を考える』番外篇——

中岡哲郎 (38 - 54)

ダグラス・ラミス／斎藤靖子訳 (112 - 125)

虚構としての「別件逮捕」——警察権力とマスコミによるいけにえ造り——

ベニヤの中から——戦後教育を掘る・1——

福富弘美 (55 - 71)

河内紀 (126 - 137)

自衛隊否定の論理——常備軍制批判——

日本訳『レーニン全集』について(完)

藤井治夫 (72 - 84)

中野重治 (138 - 149)

発作的ということ——くるい きちがい考・4——

【小説】陽暉楼 連載第二回

宮尾登美子 (150 - 164)

なだいなだ (85 - 95)

円卓

挫折型のユダヤ人——連載・私自身の歴史大サーカス——

幸福な世紀の子供たち

矢野昌史 (165 - 166)

デイヴィッド・グッドマン (96 - 109)

留置人の人権

牧野寛 (166 - 166)

にわとり日記——戦後教育を掘る・2——

河内紀 (110 - 121)

昭和五十年三月 第一九五号

展望

円卓

王宮前広場の農民集會

真継伸彦 (8 - 11)

日本における外国語教育の陥穽について——ラミス

「私」の方法

外山滋比古 (12 - 15)

氏の批判に関連して——

『收容所群島』考

菊地昌典 (16 - 37)

アジア・第三世界の交流、連帯はエスペラントで

杉村昌昭 (164 - 164)

花田清輝のこと

栗栖継 (164 - 165)  
原田泰 (165 - 166)

読者へ

公害の階級性について——公害対策担当者であった体験から——  
松本健一 (72 - 85)

リベラル・アーツ——私の学会——外側からみた大学——

佐藤忠男 (86 - 100)

大地震が来るぞ——くるい きちがい考・5——

なだいなだ (101 - 111)

### 昭和五十年四月 第一九六号

#### 展望

今、村は変り得るか

佐藤藤三郎 (8 - 11)

ざる耳

外山滋比古 (12 - 15)

「中村輝夫」の生還——台湾をめぐる皇民化運動の展開——

戴國輝 (16 - 33)

台湾における「蕃人」教育——霧社蜂起から皇軍兵士への

道——

宇野利玄 (34 - 52)

【対談】都市の髻を這うもの——『天の魚』をめぐる——

石牟礼道子／黒井千次 (53 - 71)

体験と表現／フィクションとドキュメントの合体を……／やが

ては流亡の民になる予感／ビル非人／チッソとの対立の広さと深

さ／漁師の労働と弁護士の労働／擬音語の効用

#### 円卓

【小説】陽暉楼 連載第四回 宮尾登美子 (153 - 162)

「世界文化」のこと (五) 新村猛 (148 - 152)

〈国家〉を演じる愚人像 喜友名嗣正 (163 - 164)

シオニズムは何を意味するか——中東からの報告(上)——

芝生瑞和 (112 - 123)

「あたらしい社会」へ——ギニア・ピサウからの報告——

ステファニー・ウルダン／笹尾久訳 (124 - 129)

佐野碩のこと——メキシコ・ノート——

鶴見俊輔 (130 - 135)

反近代化祭——連載・私自身の歴史大サーカス——

デイヴィッド・グッドマン (136 - 147)

供に〈教え〉〈育つ〉ことに敗れて

番城昌弘 (164 - 165)

きちがいの立場から

吉田おさみ (165 - 165)

均分相続の再考

吉田砂津子 (165 - 166)

訂正

ある書店で起つたこと——出版物流通の自由を考える——

柴田良平 (82 - 86)

権力がつくる魔の時間——松山事件における権力犯罪——

青地晨 (87 - 104)

天下おとし——戦後教育を掘る・3——河内紀 (105 - 116)

聖化と沈黙——連載・私自身の歴史大サーカス——

デイヴィッド・グッドマン (117 - 129)

パレスチナ闘争のめざすもの——中東からの報告(下)——

芝生瑞和 (130 - 146)

### 昭和五十年五月 第一九七号

展望

チット・プーミサククのこと 井上澄夫 (8 - 11)

労働者の文学 関根弘 (12 - 15)

科学を考える(3)——情報と社会についての試論 IV——

中岡哲郎 (16 - 34)

都市という病理 富永茂樹 (35 - 50)

GHQの宗教政策——宗教学的政教分離論の試み(上)——

阿部美哉 (51 - 65)

ドロップ・アウトその後

ダグラス・ラミス／斎藤靖子訳 (66 - 81)

「世界文化」のこと(六)

【小説】陽暉楼 連載第五回 宮尾登美子 (152 - 162)

円卓

《ビナウラン》の視線 喜友名嗣正 (163 - 164)

車社会の一生活誌 児玉淳 (164 - 165)

生きている時代錯誤の法律 牧野寛 (165 - 166)

訂正

昭和五十年六月 第一九八号

展望

消費の記号学

多木浩二 (8 - 11)

おもちゃの魔力

関根弘 (12 - 15)

子どもたちの時間——「たけくらべ」試論——

前田愛 (16 - 34)

表層の回帰と作品

蓮實重彦 (35 - 60)

冤罪を生む“常識”という偏見——富士高放火事件の孕む

加納良昭 (61 - 75)

もの——  
終りのない模様——イベリア・マグレブ紀行 1——

室謙二 (76 - 90)

組合派宣教師と天台僧——宗教学的政教分離論の試み

(下)——  
阿部美哉 (91 - 104)

漱石とキリスト教  
大岡昇平 (105 - 119)

さらば、潜水艦レースの夜——連載・私自身の歴史大サー

カス——  
デイヴィッド・グッドマン (120 - 130)

日光写真機——戦後教育を掘る・4——  
河内紀 (131 - 141)

「世界文化」のこと (七)  
新村猛 (142 - 147)

【小説】陽暉楼 連載第六回

宮尾登美子 (148 - 162)

円卓

ふたたび、きちがいの立場から

吉田おさみ (163 - 163)

古田氏の意見を読んで

番城昌弘 (163 - 164)

「権力犯罪」に思う  
《沖繩ンジャンニ》を考える

牧野寛 (164 - 165)

喜友名嗣正 (165 - 166)

昭和五十年七月 第一九九号

展望

採訪調査における疑念

谷川健一 (8 - 11)

ソルジェニーツィン

関根弘 (12 - 15)

誰が勝ち、何が勝ったのか

武藤一羊 (16 - 39)

ホー・チ・ミン市からの涼風

ダグラス・ラミス／斎藤靖子訳 (40 - 48)

カスバの女と「異邦人」——イベリア・マグレブ紀行

2——  
室謙二 (49 - 64)

イデオロギーも糞もないままに——連載・私自身の歴史大

杉浦明平 (14 - 17)

サーカス—— デイヴィッド・グッドマン (65 - 76)

【対談】 思想の流儀と原則——敗戦のモチーフから現在へ—— 鶴見俊輔／吉本隆明 (18 - 38)

泥まみれゴンタ教育——「翻身」をかけた被差別部落の青春——

最低の了解事項と大学紛争／責任の問題と腕力の問題／きわどい問題に対する流儀／原則と交叉路／大衆文学評価の軸／パターンの破壊と型に籠る感情

三角たべ——戦後教育を掘る・5——

河内紀 (93 - 104)

「世界文化」のこと (八)

新村猛 (105 - 111)

【小説】凍結

秦恒平 (112 - 150)

【小説】陽暉楼 連載第七回

宮尾登美子 (151 - 164)

円卓

水俣病とカナダ・インディアン——住民と住民を結ぶ旅—— 宇井純 (57 - 70)

加納氏の一文を読んで

闘いの論理——金芝河論 序—— 安宇植 (71 - 88)

危険な「高尚なるもの」への傾斜

木村昭雄 (165 - 165)

竹沢尚司 (165 - 166)

ダールマと「共存」——東南アジア世界とアイデンティティー—— 青木保 (89 - 115)

無意識と慣習に潜むもの——微視の人間史学序説——

益田勝実 (116 - 133)

昭和五十年八月 第二〇〇号

大衆文化とはなにか——ホーム・ドラマ論序説—— 佐藤忠男 (134 - 146)

展望

傷つかぬふるさと 森崎和江 (10 - 13)

昇平百年、愚を養うことまた百年

ブッキシユなオートバイ——現代感覚論控—— 清水哲男 (147 - 154)

森崎和江 (10 - 13)

清水哲男 (147 - 154)

昇平百年、愚を養うことまた百年

ブッキシユなオートバイ——現代感覚論控——

清水哲男 (147 - 154)

清水哲男 (147 - 154)

書かなかったアメリカ 金坂健二 (155 | 170)

花の都——イベリア・マダレフ紀行 3——

室謙二 (171 | 184)

【対談】動詞の可能性——ことばと文化を結ぶもの——

多田道太郎／外山滋比古 (185 | 200)

英語片カナと漢字の葛藤／音の形象化——英語を漢字風に読みかえる／動詞の可能性／人称と主体性／思考する単位としてのことばとセンテンス／内面のドラマ—— 第一人称複数

チヨムスキー——連載・私自身の歴史大サーカス——

デイヴィッド・グッドマン (201 | 220)

ずんたつた——戦後教育を掘る・6—— 河内紀 (221 | 230)

乙卯訪中日録 吉川幸次郎 (231 | 254)

【小説】春一番 白井吉見 (255 | 312)

【小説】陽暉楼 連載第八回 宮尾登美子 (313 | 326)

円卓

“小国寡民の夢” 布施浩一 (327 | 327)

“法治国の「法外の法」” 牧野寛 (327 | 328)

読者へ

【付記】表紙に「創刊200号記念特別号」とある。

### 昭和五十年九月 第二〇一号

#### 展望

生活空間の拡大とその窮屈さ 寺本英 (8 | 11)

沖縄と本土の落差 杉浦明平 (12 | 15)

国体論の連想——その含羞と畏怖—— 橋川文三 (16 | 35)

空間・分類・カテゴリー——科学的思考の原初的、基礎的な形態—— 山田慶児 (36 | 70)

土に刻む——私のみた中国の労働(上)——

迷路の世界とこころの楽園 中岡哲郎 (71 | 84)

アントニン・リーマン／竹田裕子訳 (85 | 109)

谷川俊太郎論 飯島耕一 (110 | 122)

原爆・性・人種——連載・私自身の歴史大サーカス——

デイヴィッド・グッドマン (123 | 134)

リットルちゃん——戦後教育を掘る・7——

第十二回太宰治賞募集!

河内紀 (135 - 146)

手づくりの工業——私のみた中国の労働(下)——

中岡哲郎 (37 - 53)

株式会社 筑摩書房 (147 - 147)

報道によるフレームアップ——マスコミ犯罪の具体例から——

【小説】陽暉楼 連載第九回 宮尾登美子 (148 - 162)

福富弘美 (54 - 69)

円卓

民俗学に期待するもの——谷川健一氏に

渡辺涉 (70 - 83)

児玉淳 (163 - 164)

【対談】神話と黙示録の崩壊の後に——アメリカ六〇年代——

沖繩・その断腸の系譜

喜友名嗣正 (164 - 165)

ダグラス・ラミス／ジェリー・ルービン／金坂健二訳 (84 - 102)

吉本氏にも不得手がある

奥山富一 (165 - 166)

読者へ

訂正

新しい主題とは何だったか／アメリカ神話の破壊／黙示録の崩壊と大いなるシニシズム／ヒッピー運動の中の矛盾／矛盾を越えるオルタナティブ

昭和五十年十月 第二〇二号

夢二と大杉——対象の恋愛—— 秋山清 (103 - 123)

展望

自衛官合祀拒否訴訟のその後

林健二 (8 - 11)

なにがおそろしいのか——くるい——きちがい考・6——

食いもの談義

杉浦明平 (12 - 15)

濡れ場——連載・私自身の歴史大サーカス——

行動の論理——金芝河論——

安宇植 (16 - 36)

デイヴィッド・グッドマン (135 - 144)

なだいなだ (124 - 134)

「世界文化」のこと (九)

新村猛 (145 - 150)

さしのべ合う手——メキシコに集まった女たち——

【小説】陽暉楼 連載第十回

宮尾登美子 (151 - 163)

村上節子 (65 - 74)

円卓

死の見える社会——メキシコ・ノート——

「谷川俊太郎論」を読んで

井上康二 (164 - 164)

鶴見俊輔 (75 - 94)

「土に刻む」を読んで

岡部長正 (164 - 165)

エスノセントリズムの問題——西欧文明による未開アフリ

「無意識と慣習に潜むもの」をめぐって

カ観とその歴史——

児玉淳 (165 - 166)

キャサリン・ジョージ／

梶原景昭・宮坂敬造訳 (95 - 105)

思考のおとしあな——くるい きちがい考・7——

### 昭和五十年十一月 第二〇三号

展望

なだいなだ (106 - 116)

計画のジレンマ

西川俊作 (8 - 11)

フロイトの神経——連載・私自身の歴史大サーカス——  
デイヴィッド・グッドマン (117 - 129)

曙染のように——柳田民俗学と仏教

橋本峰雄 (12 - 15)

《未発表資料》農民教育問題——社会政策学会第一回大会明  
治四〇年 講演草稿——  
柳田國男 (130 - 134)

橋本峰雄 (12 - 15)

柳田國男 (130 - 134)

思想の秋——ボードレールとフロベール——

西川長夫 (16 - 47)

解説  
第十二回太宰治賞募集！  
藤井隆至 (131 - 131)

西川長夫 (16 - 47)

地図を描く(上)——構想力としての運動——

鶴見良行 (48 - 64)

株式会社 筑摩書房 (135 - 135)

鶴見良行 (48 - 64)

ふくろぐも——戦後教育を掘る・8——  
河内紀 (136 - 146)

【小説】陽暉楼 連載第十二回 宮尾登美子 (147-161)  
円卓

「私のみた中国の労働」を読んで 吉田要 (162-162)  
安んじてよいのか 吉田おさみ (162-163)

「食いもの談義」について 井上康二 (163-165)  
「大正の恋愛」と五・四運動 奥山富一 (165-166)

読者へ

地図を描く(下)——構想力としての運動——

鶴見良行 (69-86)

ばばぬきの論理を超えて——日本化学のクロムたれ流しと韓国への公害輸出—— 井上澄夫 (87-102)  
母のイメージ——ホームドラマ論—— 佐藤忠男 (103-115)  
《やっぱり》と予断——くるい きちがい考——

なだいなだ (116-126)

皇紀二千六百三十五年——戦後教育を掘る・9——

### 昭和五十年十二月 第二〇四号

展望

「世界文化」のこと(二〇) 第十二回太宰治賞募集!

河内紀 (127-139)  
新村猛 (140-142)

街の中から政治を見る 鈴木均 (8-11)

サマルカンドの銭湯——日本の風呂の起源

株式会社 筑摩書房 (143-143)

橋本峰雄 (12-15)

自然への冠——ウィリアム・モリス紀行——

小野二郎 (16-39)

円卓

科学を考える(4)——情報と社会についての試論 V——

中岡哲郎 (40-68)

拝啓、永井文相殿 法をめぐる日本の現象

番城昌弘 (162-162)  
平光岩男 (162-163)

明治と現在の農業 牧野寛 (163—164)

10・11反CTS現闘の中から——階級的転機にたつて

TS闘争 喜友名嗣正 (164—166)

読者へ

「付記」86頁に鶴見良弘「地図を描く(上)」(二〇三号)

の訂正記事が掲載されている。

## 昭和五十一年一月 第二〇五号

展望

言葉の「暗さ」 別役実 (8—11)

聖・俗・遊から聖・遊・俗へ 橋本峰雄 (12—15)

教育のなかの競争原理——いかにしてそれを超えるか——

遠山啓 (16—26)

科学的認識と生活世界——「ありのまま」に認識するとうち

坂本賢三 (27—48)

ことについて—— 「ふつう」と「みんな」と——くるい きちがい考・9——

なだいなだ (49—60)

オールタナティブの考え方——アメリカのフリー・スクー

ルの試み—— 中村輝子 (61—70)

【対談】二つの風景・二つの体験——アフリカ・西と東——

川田順造／西江雅之 (71—91)

サヴァンナのうらおもて／ことばのキャッチボール／木の葉のおしゃれ／時間・空間・ことば／異国としてのニッポン／はぐれ人としての感覚

スペインの小さな村——ある詩人への墓碑銘(二)——

長田弘 (92—111)

ヨーロッパの水銀汚染——住民と住民を結ぶ旅——

宇井純 (112—124)

「原子力」戦争(上) ■ニュー・ドキュメンタリー・チャ

レンジ ■ 田原総一郎 (125—149)

安藤昌益と「東北」 松本健一 (150—161)

フロイトの歴史——連載・私自身の歴史大サーカス——

デイヴィッド・グッドマン (162—179)

【小説】陽暉楼 連載第十三回 宮尾登美子 (180—194)

株式会社 筑摩書房 (195 | 195)

円卓

コンコードの雪と水沢の雪

児玉淳 (196 | 196)

日本人の戦争観

牧野寛 (197 | 197)

「戦後教育を掘る」を読み終えて

宮沢信子 (197 | 198)

読者へ

健康と健全と——くるい きちがい考・10——

なだいなだ (153 | 163)

維新の精神——連載・私自身の歴史大サーカス——

デイヴィッド・グッドマン (164 | 179)

昭和五十一年二月 第二〇六号

展望

テント劇場を生息させない国

山元清多 (8 | 11)

裁判というもの

金達寿 (12 | 15)

芸術家の消滅

宇佐美圭司 (16 | 38)

差別批判の論理

安宇植 (39 | 61)

「差別語」の理論的解明へ

三浦つとむ (62 | 72)

情況の浮力に抗するもの——自壊を方法として——

わが故郷をどうするつもりか 曾我欽也 (197 | 198)

芹沢俊介 (73 | 85)

同時代を生きる「気分」——「しらける」ことと「いらだつ」ことを超えて——

川本三郎 (86 | 101)

時代小説とは何か

斉藤駿 (102 | 122)

「原子力」戦争(中) ■ニュー・ドキュメンタリー・チャレンジ■

田原総一郎 (123 | 152)

【小説】陽暉楼 連載第十四回

宮尾登美子 (180 | 194)

円卓

「教育のなかの競争原理」を読んで

田原史良 (195 | 195)

葬いの差別

古田砂津子 (196 | 196)

痛恨の思い出——「日本共産党の研究」を読んで

竹沢尚司 (196 | 197)

七七

読者へ

訂正とお詫び

昭和五十一年三月 第二〇七号

展望

私の都市——獲得する心象風景

楨文彦 (8-11)

差別というもの

金達寿 (12-15)

異郷の神を畏れつつ——知識人と悪霊——

青木保 (16-35)

衣装としての思想——中国人における肉体不在——

中野美代子 (36-51)

『薙露行』の構造——江藤淳『漱石とアーサー王伝説』批

判——大岡昇平 (52-70)

『遠野物語』考——文学と民俗学のあいだ——

ロナルド・A・モース (71-80)

〈アジア的〉国家の論理構造——瀧村隆一 (81-106)

「原子力」戦争 (3) ■ニュー・ドキュメンタリー・チャ

レンジ ■

中人り——連載・私自身の歴史大サーカス——

田原総一郎 (107-135)

デイヴィッド・グッドマン (136-150)

【小説】陽暉楼 連載第十五回 宮尾登美子 (151-164)

円卓

「情況の浮力に抗するもの」を読んで

山中克之 (165-165)

大阪日仏学院の教師ストにふれて

杉村昌昭 (165-166)

読者へ

昭和五十一年四月 第二〇八号

展望

人間と猫の住む場所

権力というもの 後藤明生 (8-11)

中国の新しい挑戦と実験——大寨で感じたこと——

金達寿 (12-15)

日高六郎 (16-33)

朝鮮人の「日本名」——日本統治下の日本名使用の由来と「  
氏改名」—— 金一勉 (34 - 54)

【対談】詩人の場所 田村隆一 / 中桐雅夫 (55 - 68)

近代化に乗れない心 / 「荒地」の試み / 詩は文明のメニユー /  
「個」というものの重要さ / 詩の追求者——芭蕉と二茶 / 詩との  
出会いのカリキュラム / 詩人の「政治的」義務

孝行のゆくえ——ホームドラマ論—— 佐藤忠男 (69 - 82)

「原子力」戦争 (4) ■ ニュー・ドキュメンタリー・チャ  
レンジ ■ 田原総一郎 (83 - 111)

長距離ランナーの遺書——円谷幸吉の天逝——

沢木耕太郎 (112 - 129)

【小説】迷走 (上) 秦恒平 (130 - 149)

【小説】陽暉楼 連載第十六回 宮尾登美子 (150 - 164)

円卓

被差別から反差別へ 高岡龍夫 (165 - 165)

北方領土を買い取れ 牧野寛 (165 - 166)

編集を終って

昭和五十一年五月 第二〇九号  
展望

差別を「商う」もの 中野好夫 (8 - 9)

悪法は法であるか 森恭三 (10 - 11)

ロッキード脳乱 松岡洋子 (12 - 13)

【対談】「市民的共和」の可能性——国家・法人企業組織・

市民—— 松下圭一 / 宮崎義一 (14 - 37)

多国籍企業——企業中心の総合化の傾向 / 政治を動かすユ

ニットの複合化 / 会社人と市民——企業のオートノミーが人間

を分断する / 企業内福祉制度批判 / 企業内デモクラシーの可能性

/ 社会的剰余の性格とその国民管理 / コモン・グッド! コモン・

ウェルス! 谷川健一 (38 - 49)

祭場と葬所——「山宮考」覚書—— 関達な愚者——またはサンチョ・パンサ論——

竹内成明 (50 - 69)

糞氏の思想 山田稔 (70 - 78)

英語の早期教育は必要か 野元菊雄 (79 - 86)

洗霊と憑霊——日韓巫俗の比較試論——

『航西日記』の渋沢栄一

桜井徳太郎 (87 - 105)

歴史小説とは何か・再論——事実と史観の関係——

杉本秀太郎 (106 - 116)

菊地昌典 (14 - 27)

【小説】迷走 (下)

秦恒平 (117 - 138)

苦難の愛——精神的考察——

北森嘉蔵 (28 - 43)

【小説】陽暉楼 連載第十七回

宮尾登美子 (139 - 154)

仮字正法眼蔵の秘密——道元とその弟子懐英——

【小説】寺泊

水上勉 (155 - 163)

柳田聖山 (44 - 61)

円卓

大寨の農民たちから学ぶ

岡部長生 (164 - 164)

【鼎談】個の論理をこえて  
宇佐見圭司<sup>(マユ)</sup>／高橋悠治／原広司 (62 - 81)

寡黙なる風土

吉田仁吉 (164 - 165)

教育の美名にかくれた暴挙

田中源蔵 (165 - 166)

六〇年代の感性がめざしたもの／近代をとらえかえす視点／見ることの不信をかりたてるもの／主題と「二枚のスケッチ」／作品の内因性

編集を終って

政治的文化と指導者

海原峻 (82 - 92)

同時代者であること——ある詩人への墓碑銘 (二)——

長田弘 (93 - 115)

昭和五十一年六月 第二一〇号

展望

柳田民俗学のイギリス起源

リヒテンシュタインとの出会い

飯田善国 (8 - 9)

ロナルド・A・モース／宇野正人訳 (116 - 129)

ぼくは自然にかえる

横尾忠則 (10 - 11)

魂気の如きはゆかざるなし——漢墓を訪ねて想う——

傾心、そして白

加納光於 (12 - 13)

【小説】陽暉楼 連載第十八回完結  
吉川忠夫 (130 - 148)

メタセンター

メタセンター

円卓

宮尾登美子 (149 - 163)

市民行動としての要求

加藤隆史 (164 - 164)

韓国国内の反ファシズム闘争へ支援

番城昌弘 (164 - 165)

「悪法も法」の周辺

牧野寛 (165 - 166)

編集を終って

私法・中国遠望

富士正晴 (46 - 52)

カナダ水俣病の問うもの——カナダ横断フィルム・キヤラバン——  
土本典昭 (53 - 73)

【インタビュー】柳宗悦を語る

寿岳文章／ききて 幼方直吉 (74 - 93)

柳宗悦との出会い／「ブレイクとホイットマン」／軍人ぎらいの体質／国際的感覚と土着性／妙好人への傾斜

柳宗悦の韓国美術観——韓国美術史研究の方法を確立するために——

崔夏林／高崎宗司 (94 - 103)

解説

高崎宗司 (103 - 104)

父宗悦と朝鮮

柳宗玄 (105 - 115)

藪床二代

熊王徳平 (116 - 119)

風葬

一色次郎 (120 - 137)

【対談】一休

唐木順三／水上勉 (138 - 163)

情報の社会的モデルのために(上)——情報と社会について

の試論Ⅳ——

中岡哲郎 (14 - 38)

韓国の魂の冬——金芝河裁判を傍聴して——

真継伸彦 (39 - 45)

「王孫の美誉」／身現／堅田の一休／『狂雲集』への疑問／酬

語／風狂と批評

円卓

百里基地闘争の二十年

岡部長生 (164 - 164)

日共に問う、「執権」放棄と文化問題をめぐって

竹沢尚司 (164 - 165)

竹のカーテンの陰に何かがあるのか

渡部勝義 (165 - 166)

編集を終つて

円卓

暴露の時代——マスコミと「内部告発」と——

村上薫 (83 - 95)

気遣いの構図——ホームドラマ論——

吉川勇一 (96 - 113)

海からの視線

佐藤忠男 (114 - 129)

周礼について

三神真彦 (130 - 142)

「私法・遠望毛沢東」

百瀬正昭 (164 - 164)

壮大な未来図——美の浄土

田村裕 (164 - 165)

「韓国の魂の冬」に思う

牧野寛 (165 - 166)

## 昭和五十一年八月 第二一二号

展望

「お留守番国会」ということ

神島二郎 (8 - 9)

交換について

作田啓一 (10 - 11)

まずくて高くて危険なヤサイ

飯沼二郎 (12 - 13)

知識論のための覚書

竹内成明 (14 - 49)

都市空間のための見取図——都市と集団とにおける構想力に

ついて——

富永茂樹 (50 - 64)

アジア、わたしの視点

森恭三 (65 - 82)

ポスト毛の中国とデタント——米中同盟か中ソ和解か——

わたしの立場

楠原彰 (12 - 13)

## 昭和五十一年九月 第二二三号

展望

死病と医者

松田道雄 (8 - 9)

ヨーロッパの国境線

吉岡昭彦 (10 - 11)

多様性について——機械論的生命観批判——

飯島衛 (14—25)

生物界の存在様式——その物理学的視点——

寺本英 (26—40)

恥の日本語

田中克彦 (41—56)

「共同体」のかなたへ——コミュニケーション構想のための比較社会学・序説——

真木悠介 (57—68)

非暴力革命と抑圧民族——日本人にとっての三・一運動——

和田春樹 (69—85)

模倣のめぐみ——芸術創造における模倣の役割——

佐々木健一 (86—97)

浪華の非人合戦——『貧人太平記』とその背景——

岡本良一 (98—107)

明治歴史文学の原像——政治小説の場合——

前田愛 (108—133)

一つのレオナルド像

下村寅太郎 (134—144)

【対談】人間・政治・文学

中野重治／白井吉見 (145—164)

「甲乙丙丁」のリアリティ／『リンチ共産党事件』の思い出

／リアリズムの欠如と潔癖主義／「雨の降る品川駅」／文学との

出会い／丸岡藩と越前藩／別個の維新／今後の仕事

円卓

「気遣いの構図」と小津作品 中村正直 (165—165)

「業者アスト」問題 松島芳石 (165—166)

編集を終って